

心豊かな暮らし

<http://www.yabashi.co.jp/house/>

# 縁<sub>en</sub>

2016 Vol.40 autumn





矢橋林業株式会社 名古屋ショールーム (欧)

季刊  
縁<sub>en</sub> 2016 Vol.40 autumn

## c o n t e n t s

P 3 >>

特集

Renovation 施工例 岐阜県大垣市 Y邸

P 9 >>

矢橋林業株式会社 木材事業本部  
名古屋ショールーム 「三豊居」(さんぽうきょ)

P 13 »

「矢橋の家」 MODEL HOUSE  
工場見学会 随時受付中！

連載

中山道赤坂つれづれの記 文/故 清水春一  
俳聖芭蕉(二)

心豊かな暮らし

季刊誌 創刊10周年！

季刊誌「縁」をご愛読いただき、ありがとうございます。

バックナンバーは、こちらよりご覧いただけます。  
<http://www.yabashi.co.jp/house/>

表紙 矢橋工房 木灯(ことう)  
P.1 季刊誌Vol.1~40 表紙写真





Sunroom



Cloak



Drawing Room

■ 特集

Renovation 施工例

岐阜県大垣市 Y邸

大正から昭和初期にかけて建てられた和と洋が融合した建物。  
建築当時の趣きそのままに、更に付加価値を付けるリノベーションを行った。  
この建物には「三宜亭」(さんぎてい)という名がついている。  
三宜とは、四季の自然美の代表的なものである雪月花を、  
「雪に宜し」「月に宜し」「花に宜し」としたもの。日本の美しい四季の  
移ろいを感じることができる。



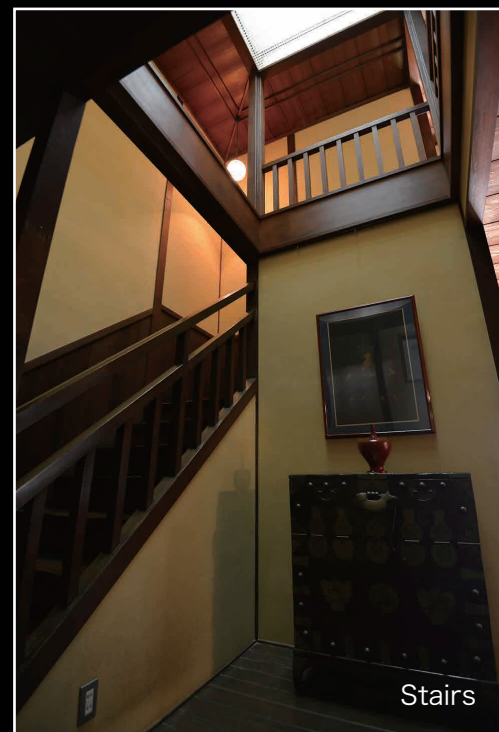
Living Room



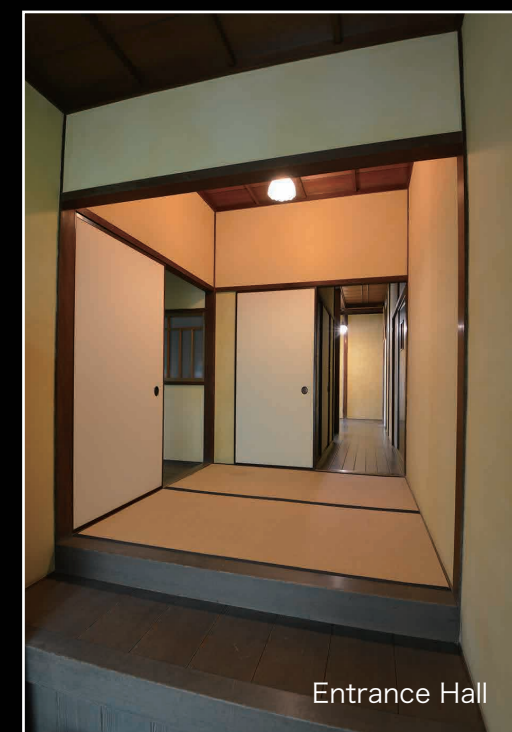
Restroom



Bathroom



Stairs



Entrance Hall





# 再生という選択 Renovation



## 温故知新

古き良き価値を現代に甦らせる

弊社は時を経て歴史の詰まった古き良き建物を大切に住み続ける事は美德だと考えております。伝統や思い出の詰まった家の時間の経過でしか出ない木の色、艶に価値を見いだす事は日本の自然、文化、伝統、遺産を守る事と同じ価値観だと言えます。しかし、現代生活は安全で便利で快適で無ければなりません。伝統や思い出の詰まった古き良き家に現代の安全で快適で便利な技術を取り入れお客様に古い家を直して良かったと満足して頂く事が弊社にとっての温故知新であり役割であると考えています。



2F Bedroom



2F Drawing Room

1F Drawing Room



BEFORE



AFTER





SHOWROOM OPEN

矢橋林業株式会社 木材事業本部  
名古屋ショールーム

さん ぼう きょ  
「三 豊 居」

素材の豊かさ  
技能の豊かさ  
心の豊かさ

矢橋の理念に沿った

「商品開発」  
「建材を作成する Vietnam 人技能者」  
「日本人の大工」

が心豊かな暮らしを目指して力を尽くす事。

矢橋の理念である「心豊かな暮らし」  
の具体的な形として

「戸建て住宅」  
「建材商品」  
「マンション改装」

の3つ方法で豊かさを表す場。

「矢橋の家」 3シリーズの融合

60TH ANNIVERSARY  
悠楽  
YUURAKU

和  
NAGOMI

欧  
OU





## 心豊かな暮らし

現在の住宅産業は大変厳しい状況下におかれております。弊社も受注には苦戦を致しておりますが、何処に問題があるのか？を常に謙虚に省みております。「心豊かな暮らし」の理念のもとに商品の開発に始まり、営業の顧客サービス、土地の調査から構造材、建材の製造工程、現場での施工工程と妥協をしない仕事に努めて参りました。しかし、日本の人口は減少し、当然ながら住宅市場は縮小しております。これからが真価を問われる時期だと思っております。ポリシー、品質を決して下げることなく、コストダウンに取り組んで参る所存でございます。家をお考えの方がいらっしゃいましたら、是非ともご紹介を賜りますようお願い申し上げます。

現在では耐震性能の見直しなどの基本性能の強化がなされて参りました。また、住宅に求められる機能も多様化して参りました。政府は、ZEH(ゼッチ)と言われるNet Zero Energy House(ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス)を2020年までに標準新築住宅とすることを目指しております。エネルギー効率を上げることは重要な国策であり、必要条件だと思います。しかし、現在の住宅設備機器により短期間のエネルギー効率は上がりますが、長期間となるとどうでしょう？住宅の耐用年数は車とは違い一生であり最低でも50年～100年の耐用年数があります。住宅設備機器が革新され、その機能が改善される毎に設備を変えていたら本当にエネルギー効率は上がるのでしょうか？

少なからず疑問が残るところであります。

日本には四季があり、気候の良い季節には涼やかな風が家に入り、自然のこころ良さを満喫出来る、それが日本の良さではないかと思ひます。季節の変化を肌で感じながら、気候の厳しい時期には電気の機能を使い適温にすることも選択出来る、年中同じ温度ではなく、四季のある日本で暮らす事も心豊かな暮らしの一つではないかと考えております。

矢橋林業株式会社  
代表取締役社長 矢橋龍宜



**矢橋林業株式会社**  
YABASHI

住宅部 〒503-2122 岐阜県不破郡垂井町表佐410-1 TEL.0584-22-0001  
品質マネジメントシステムの国際規格であるISO 9001 認証取得企業

名古屋ショールーム「三豊居」

TEL. 052-870-9290 営業時間：10:00-18:00  
定休日：水・木（盆・年末年始）

<http://www.yabashi.co.jp/house/>

モデルハウスはこちらをご覧ください。



矢橋の家の理念  
人が住むべき緑豊かな心休まる良い環境に、天然素材を活かした日本の伝統を受け継ぐ家に住まう。日本の原風景を取り戻し、日本人が育つ住環境をつくる。

矢橋の家のこだわり  
安全 安心 本物 快適 家事 収納 子育て 趣味

温故知新

懐 KAI MODEL HOUSE



欧 OU MODEL HOUSE



心豊かな暮らし  
矢橋の家

明治・大正・昭和初期の日本における西洋建築を再現。クラシックホテルの様な佇まいは、古き良き時代を思い出させてくれます。できる限り自然素材を使い、ひとつひとつ丁寧に仕上げました。暮らしの中で傷がつく、家に時代がついていくのも本物ならではの楽しみです。



工場見学 随時受付中！

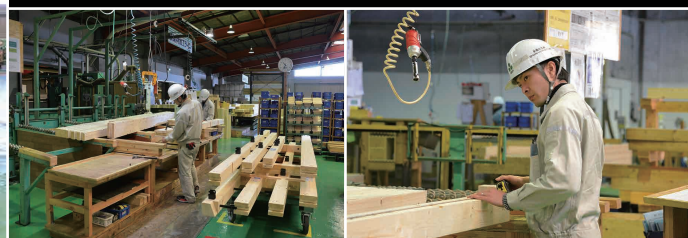
※ご希望の方は、下記フリーダイヤルまでご連絡ください



垂井工場・昼飯工場見学  
「VEGETABLE SHOP余呉農園」へ  
昼食・お土産付

まずは、矢橋の工場を見てください。

SHOWROOM



矢橋林業株式会社 0120-884-039 <http://www.yabashi.co.jp/house/>

矢橋林業

検索

悠楽 YUURAKU MODEL HOUSE



本物

# 俳聖芭蕉(二)

うみゆり連載集 中山道赤坂つれづれの記 故清水 春一

俳聖松尾芭蕉が美濃国を訪ねた第二回目は貞享五年(二六八八)の春、大和行脚の延長で、岐阜の妙照寺住職であった己百上人の招きによって鶴飼見物を楽しんだときでした。

ところどころ見めぐりて、洛(京都)に暫く旅寝せしほど、みのの国よりたびたび消息ありて、桑門(さくもん)己百のぬし、みちしるべせむとてとぶらひ来り待て

しるべしてみせばやみのの 田植歌 己百  
笠あらためむ 不破のさみだれ 芭蕉

こうして出迎えに來た岐阜の己百上人とともに、芭蕉は「六月六日大津を出、ゑち川に泊、七日赤坂に二宿、八日岐阜に到る、秋芳軒宜白を主とす……租翁の日記自筆にして三行ばかり」とありますので、赤坂の矢橋木巴(藤十郎、矢橋総本家第四代三郎兵衛の次男。木巴は号)の邸に宿泊したことを裏付けることができます。

『大垣市史』その他によると、岐阜を訪れたこのときに大垣へ来ていることになっていますが、弘化二年(二八四五)正月発刊の水戸の幻窓湖中が書いた『芭蕉翁略伝』などにも上記のような

記載があり、間違いないと思われます。

かつて『赤坂町史』編集のときにも、それを確かめました。また矢橋家に伝わる話や、木巴の覚書メモなどと照合して事柄の一致することを確認できたのです。

それは、最初に中山道を辿って、美濃に入り、国分寺に参拝して赤坂宿にいたり、矢橋家に草鞋を脱いで泊、歓待され、湯殿の行灯に句落書のように認めたといわれ、また懸崖(けんがい)葛の葉の画賛に「葛の葉の おもて見せけり今朝の霜」の一句を揮毫したと伝えられています。

## 観光名所をつくった旅

岐阜を訪れた芭蕉は前後およそ二ヵ月ほども滞在し、安川落梧(小間物雑貨商を営業している富豪で、通称は本町の万屋助右衛門)や加島鷗歩(油商を営む富豪で、玉井町辺りに別荘があり、通称は善右衛門)に会っています。

この人たちの求めに応じて芭蕉は十八楼の命名をしたり、此のあたり 目に見ゆるものは 皆涼し」の有名な句を遺したり、

「又たぐひ 長良の川の 鮎なます」だとか、「おもしるうて やがて悲しき 鵜舟かな」や「夏来ても ただひとつ葉の 一葉かな」などの句をつくって岐阜観光名所の種を蒔いたのも、この年のことでした。

こうして長滞在の期間にあちらこちらを訪ねたり、多くの人々と交遊して、美濃の文学発展に大きな影響を与えたことは事実ですが、大垣を訪れたのも、恐らくこの間のこととて、岐阜へ行く途次でなく、岐阜から訪ねてきたのであったと考えられます。

何はさて、芭蕉の赤坂泊りについては、矢橋藤十郎さんという人物がいたからのことであり、藤十郎さんは父三郎兵衛(交慰)が谷木因や芭蕉らとともに、京都の北村季吟門に弟子入りしていたという親しい間柄でした。その因縁で谷木因の弟子として「木巴」の雅号(ペンネーム)で俳諧を嗜み、木因の指導をうけるとともに、芭蕉にも師事しました。北村季吟はもとよりのこと、江戸の宝井(榎本)其角や服部風雪にも、自作の添削を乞うほどの交流をもち、そうした関係から多くの文人墨客たちとの幅広い交際があったようです。

当時、一流の文化人であり、また父の交慰も健在であった(元禄四一六九一年六月没)ことでもあり、父子ともに芭蕉の来訪を喜んで迎えたであろうことは疑う余地もありません。

こうした矢橋木巴という人の風雅の道を楽しんだ人生を推察してみるのも、また有意義なことと思います。ここに木巴遺作の一部をご紹介します。

蛸燭(たうろう)も 箱で丸めて 遠光り  
もろもろの もろこはもろこ 鮑(あわび)は鮑  
つばからの 水やうき世の ももの花  
兄子子の 子子子 日当ご  
土銀真金の 中に眼鼻や 初日影  
巢を作る 春の納豆に 毛がはへて  
初雪に 丸い家なし 裸虫  
鶯や 元日草の なき時代  
初夢の 白川に夜も 赤坂や

一般的には理解しにくい難しい表現のものもあり、よく勉強し、ユーモアや風刺に富んだ風雅の人であったことが窺えます。